



古紙情報回収業 磯田道史

私は古文書の研究者である。だから、いつも古い紙のなかにいるが、昭和の先輩学者には、もっとすごい「古文書つわ者」がいた。その学者は耳鼻科に行った。すると耳鼻科医が耳をのぞき、「あなたは古紙を扱うお仕事ですか」と、ずばり言われたそうである。歴史学者は、古文書に接する。古紙によくいる虫が歴史学者の耳に這入り込んでいて、医者には職業がわかった、という話である。さいわい、私の耳には、まだ虫が住み着いたことはない。しかし写真のように、古文書に埋もれて暮らしている。紙を物体として回収するのは古紙回収業。私がやっているのは、古紙に書かれた情報を回収する「古紙情報回収業」である。

自分でいうのも、なんだが、この仕事は本当に面白い。紙には、なんでも書いてある。数百年前の、夫婦げんかの顛末、

男がエッチなお店に行つて払った金額、みんな、わかる。発明された紙を改良し普及させた蔡倫に感謝したいほどである。とりわけ、日本は古い時代の古文書が多い。森の国だから、紙がよく作られ、島国だから、よく残った。百五十年前でも成人識字率が四〇%もあった。当時、これは北西ヨーロッパに次ぐ水準である。中国や朝鮮は、こんなには高くなかった。簡単な「かな」文字を持っていたことも大きい。読み書きがさかんであれば、紙もたくさん作られる。

日本史上、三度、「紙の爆発的普及」が起きている。一度目は、飛鳥奈良時代。大陸から仏教とともに紙すきが伝わり、寺・宮殿・役所に紙が普及した。二度目は、一六五〇〜一七〇〇年頃、江戸前期。紙すきが普及し、庶民までもが、紙を消費するようになる。この時期に、古文書が爆発的に増えたので、私も楽しく仕事ができるわけである。江戸末期に、日本にきたヨーロッパ人が、日本では何を買っても領収書してくれる、こまかい説明書きもついでくる、日本はイギリスみたいだ、といっている。三度目は、明治の近代化。工場で製造される洋紙の時代がはじまった。私の実感では、明治二〇年代後半から、和紙から洋紙に変わっているように思う。



いそだ・みちふみ ● 歴史学者。岡山県生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程修了。国際日本文化研究センター准教授。史料を読みこみ、社会経済史的な知見を活かして、歴史上の人物の精神を再現している。著書に『近世大名家臣団の社会構造』『武士の家計簿』『龍馬史』『江戸の備忘録』『無私の日本人』『徳川がつくった先進国日本』『日本史の内幕』『素顔の西郷隆盛』など多数。

自宅古文書研究室にて

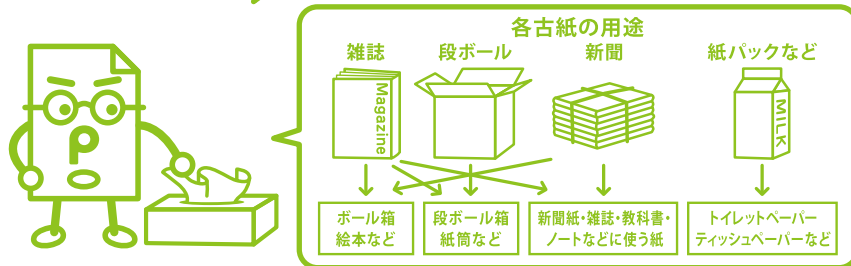
この時期に、北海道・樺太のパルプの利用がはじまった。以前はコウゾやミツマタの皮で、人間が和紙を作っていた。このあたりから、針葉樹のパルプを使い、工場で洋紙が作られるようになった。丁度、このころ、みんなが小学校に行くようになり、本や新聞、紙の消費も激増した。各家庭が新聞を宅配してもらおうとか、新書という手軽な教養書を読むとか、およそ世界中の国々ではみかけない、日本だけの紙文化ができた。紙が日本を文明国にしたといつてよい。

とにかく、紙は、ありがたい。一生涯、読んでも読み切れない情報が紙にある。そのうち、私の耳にも、虫が引つ越してくるかもしれないが、古紙情報の回収という紙とのつきあいを、これからも大いに楽しみたい。そして、その秘密の内容を、本のかたちで、みなさんにお知らせしたい。今夜は、みつけた忍者の手紙を、こっそり読むつもりである。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

回収された紙、次は何になる？

段ボールはまた段ボールに。紙パックはティッシュやトイレトペーパーに。そうやって、一度使われた紙は回収されて、また新しい紙へと生まれ変わっていきます。あなたが毎日いろんな場面で使っている紙とも、またどこかで会えるかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

次号は10月4日号、畠中 恵さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>